The Journal of Tokyo Medical Association

TMA

医師と東京都医師会を結ぶ会報誌

10
2026 VOL.79
NO.9



言葉より大切なもの

鈴木俊貴
東京大学
先端科学技術研究センター
動物言語学分野 准教授

×

尾﨑治夫
東京都医師会
会長



言葉より大切なもの

鈴木俊貴
東京大学
先端科学技術研究センター
動物言語学分野 准教授

×

尾﨑治夫
東京都医師会
会長

シジュウカラという鳥が言葉を話すことを突き止め、世界で初めて人間以外の動物に言語能力があることを発見した東京大学先端科学技術研究センターの鈴木俊貴准教授と尾﨑治夫会長との特別対談を、先月号から引き続きお届けします。言葉を使う前にまず人間性や思いやりがあり、それを伝えるために言葉を使う。その本質について、そこで問われる大切なあり方について、お互いの専門性からさらに意見を交えて語り合っていただきました。

対談日：2026年7月3日 東京大学 先端科学技術研究センター 鈴木研究室にて

「なぜその言葉を使うのか」から コミュニケーションを考える

尾﨑　私が生まれ育ったのは、八王子市の西部にある恩方村（当時、後に八王子市へ編入）です。高尾山などの山に囲まれていて、周りは生き物ばかりの環境でしたから、幼い頃から自然や生き物が好きでした。「人間も同じ生き物の一種なのだ」と感じていたことが、自分が医師を志した根底にあるように思います。

鈴木　生き物が好きだということは、自分と他者をフラットに見る視点につながると感じます。私は鳥を長年観察してきて、鳥の世界と人間の世界に上下関係はないと考えるようになりました。あらゆる生き物が対等だと思うようになって、最近ではテレビ出演などの場面でも全く緊張しなくなりました。

　自然の中に身を置いて、自分とは全く違う多種多様な生き物に囲まれて生きていくと、一つひとつの命の重みや多様性に気づかされる機会が多いです。そうした経験があると、医師の方も患者さんと対等な立場で一緒に治したいという気持ちを伝えることを大切にして、最適な手術や処方に結びつくのではないでしょうか。

　私の尊敬する、京都大学前総長で現在は総合地球環境学研究所所長の山極壽一先生も、まさにそうした姿勢を持たれた方です。

尾﨑　ゴリラ研究の世界的権威として知られる先生ですね。

鈴木　はい。何度か対談させていただいたことがあるのですが、ゴリラの世界から人間の世界を俯瞰的に見る独自の観点を持たれた方です。

　ゴリラは強い力を持ちながらも、決して他者を傷つけません。一方、例えばニホンザルなどのマカク属の動物はすぐ喧嘩をします。ゴリラは自分の力を自制する強い精神力を持って、他者と対等な立場の中で社会を築いていることに山極先生は研究を通して気づかれて、同じように当時助教だった私とも同じ目線で対話をしてくださいました。

　他者より上に立つためや、他者を傷つけるための言葉は汚いです。言葉は本来、他者に自分の思いを伝え、協力し合うために生まれたものです。言葉を発する前の「なぜその言葉を使うのか」という心持ちが重要なのだと実感します。



尾﨑　そうですね。現代はAIやSNSなどの発信ツールが多様化しています。それらは確かに便利ですが、安易に用いる前に、自分の気持ちの動きを考えなければいけないように思います。

鈴木　そうした感情は、言葉が文字になったときに消えてしまいます。音声であれば声の抑揚から、さらに対面で場を共有していれば表情や体の向きなどから多くの情報を受け取ることができますが、SNSのように文字情報だけだと前後の文脈までよく読んでようやく漠然と想像できる程度です。その文字にどのような感情が込められているのかまでの情報を残すことには限界があります。

　だから人間は、言葉で伝えきれない情報を補うために、絵を描いて伝える工夫をしてきました。解剖学の人体解剖図などはまさにそうですよね。視覚的な表現も人間が持つ素晴らしい能力で、言葉につながる部分だと思います。

尾﨑　おっしゃるように医学の発展には文字や書物が不可欠でしたが、目の前の患者さんと向き合う医療の現場では、言語以外のコミュニケーションも非常に大きな意味を持ちます。

　例えばオンライン診療は、もともと信頼関係が構築されている患者さんであれば有効だと思います。しかし、いくら通信速度が速くて表情を細かく読み取れるといっても、初診から終診まで画面越しでは補いきれない部分があります。お互いに同じ空間で息づかいを感じ取り、生きている実感を共有してこそ伝わってくるもの、伝えられることがあると思います。



時空を超える言葉のメリットとリスク、その前にある本質的な価値とは

尾﨑　オンライン診療やWeb会議はコロナ禍を機に普及しました。医師会の会合などで多くの人と相対しますが、ずっとオンラインで議論をしていると画面越しでは相手の雰囲気や人柄が掴みきれません。鈴木先生がおっしゃったように、雰囲気や顔つき、身振り手振りまで含めて実感する機会がコロナ禍は全くなく、実際に会うと印象が大きく異なることがよくあります。

鈴木　桐朋高等学校の時の先生とは今も交流があって、その先生から聞いた話なのですが、コロナ禍で生徒を指導する際に2mのソーシャルディスタンスを取ると、うまく会話ができずにコミュニケーションが難しくなったそうです。たった2m離れただけでやり取りが困難になるわけですから、オンラインは言うまでもありません。電話よりは相手の表情が見える分だけ情報量は多いものの、対面と同じように気持ちを通わせたり、言葉の奥にある意図を十分に読み取ったりすることには壁があります。

どれほどテクノロジーや文明が発達しても、人間の基本的な体の構造は約30万年前からほとんど変わっていません。インターネットが普及して約30年、オンライン会議に至っては10年も経っていませんが、その短期間に私たちの肉体は進化しないし、認知の仕組みはずっと同じなわけです。

個人的な話になりますが、最近はメールやアンケート対応などの事務作業に追われています。動いているのは、私がキーボードを打つ指と、文字でサインしたことによって誰かから私に移る責任の所在くらい。そんなことに時間を割くよりも、私は鳥を観察している方が社会貢献につながるのではないかと感じるほどです。不必要な負担やストレスや摩擦を生みうる言葉に捉われすぎず、いかに思いやりや豊かさのある社会を築いていくかを、医療や教育の現場をはじめ社会全体で考える必要があるように思います。

尾﨑　鈴木先生の研究は、私たちが普段当たり前だと思っている言葉やコミュニケーションのあり方を振り返って、新しい気づきを得るための大きなヒントを与えてくれます。言葉にしてもSNSにしても、そうした便利なツールが増えたからこそ、そこに含まれるリスクを自覚して上手に付き合っていかないといけませんね。

鈴木　そうですね。私は鳥を見続けてきて、人間の言葉というのはひどく曖昧なものなのに、私たちはそれに中毒的に依存してしまっていると考えるようになりました。

シジュウカラはヘビを意味する「ジャージャー」という声を出して子どもを守ったり、仲間と協力して餌を探したりするために言葉を使います。生きるためのポジティブな目的でコミュニケーションしている。でも人間は、誰かを傷つけたり、排斥したりするために言葉を使ってしまうことがあります。

尾﨑　鳥の世界と人間の世界を往復されていて、両者の言葉の違いや人間の言葉の特殊性について何か見えてくるものはありますか。

鈴木　人間の言語における最も異質な特徴は、場や時間を共有しないコミュニケーションがあることです。オンライン会

議や電話の音声だけでなく、メールや手紙、書物といったテキストデータも、相手と同じ空間にいない状態でやり取りされます。これは動物界ではほとんど見られません。動物たちは基本的に同じ場所に一緒にいて、共通の敵を警戒したり、求愛したりするためにコミュニケーションします。

一方、人間の言葉は時空を超えることができる。過去の歴史を記録し、現在の出来事を伝え、未来の計画を立て、遠く離れた人とも意思疎通を図ることができる。とても便利でメリットもたくさんある反面、先ほどから話している、場や時間を共有しないことのリスクを正しく理解した上で使わないとストレスフルな社会につながってしまうと思います。

尾﨑　医療の現場では、まさにそのリスクによる弊害が頻繁に起きています。現代では、多くの人が体調を崩した際にインターネットで症状を検索したり、テレビの番組を観たりして、その情報だけで自己診断してしまいます。例えば、心臓は胸のほぼ中央にありますが、ほとんどの人が左側にあると思い込んでいます。すると左胸が痛む人は「自分は心臓の病気で狭心症ではないか」と決めつけてしまい、強い不安を抱えた状態で初診に訪れます。

そうして固まってしまった先入観を解きほぐすには、多くの時間と対話を必要とします。心臓の位置や痛みのメカニズムを丁寧に説明していけばわかってもらえますが、それでも納得してもらえない場合、心電図や超音波検査をして目に見えるデータを示すことで、ようやく安心してもらえるケースも少なくありません。

制度上の観点から見れば、時間をかけて対話による説明を行うだけでは十分な診療報酬が得られず、各種検査を実施する方が診療報酬は高くなります。しかし、患者さんにとっては「自分の話を聞いて不安に寄り添ってくれた」という実感や納得感が、最終的に安心感につながります。効率やデータだけに頼るのではなく、目の前の人と向き合い、心を通わせ、ふれあいを大切にすることが、医療における信頼関係の根幹にあると感じます。

鈴木　まさにその通りですね。効率的なツールの利便性に隠れてしまいがちな、言葉の発せられる前の思いやりや人間性をいかに大切にするか。医療現場のお話を通じて、その本質的な価値に改めて気づかされました。

尾﨑　言葉やコミュニケーションから、医療が大切にしなければならないあり方が見えてくる貴重な機会となりました。本日はお時間をいただき、ありがとうございました。

